

バードリサーチ ニュース

2009年4月号 Vol.6 No.4



Tringa erythropus
Photo by Tsutsumi Akira

参加型調査

冬鳥ウォッチ速報 アトリ、アトリ、アトリ…

平野 敏明

冬鳥ウォッチがスタートして3年目。今冬は、3月31日までに39人の方から昨年を上回る78件の情報が届きました。しかも、3年目にして、早くも冬鳥たちの渡来数の著しい変動を捉え、記録に残すことができました。以下に、今冬の調査結果の一部を紹介いたします。

1. 著しく多かったアトリ

今冬も、冬鳥ウォッチの調査対象種の6種すべてが記録されました。情報件数が最も多かったのは、昨年までと同様にカワラヒワ(46件)でしたが、2番目に多かったのは何とアトリでした。アトリの情報件数は、06年が41件の冬鳥の全情報中10件、07年が75件中20件で割合は変わっていませんでしたが、今年は78件中39件で昨年の約2倍です。さらに、調査地点で一度に観察された個体数も増加しました。個体数は5つのランクに分けて報告してもらっていますが、その割合は、昨年まで多かった1~20羽が減少し、変わってそれ以上の3ランクすべてで増加しました(図1)。特に、201羽以上の大きな群れは、全体の20%を占め、その中には数千羽から一万羽の大群も記録されたのです。しかし、このような大きな群れの報告は、九州地方の比較的狭い地域に集中して行っていました。九州地方に現れた大きな群れが分散して数か所で観察されたために、今年、201羽以上

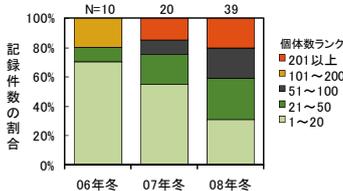


図1. アトリの3シーズンの記録状況。

の個体数ランクが多かったのかもしれませんが。

九州地方だけでなく、関東地方でも500羽を超えるアトリの群れが報告されています。こちらでは市街地でも観察されていて、東京都内の複数の都市公園でアトリの群れが記録されました。ですので、今冬はアトリの当たり年だったことは間違いありません。ただ、図2をみると分かるように、現時点では、情報を提供していただいた地域が関東地方や九州地方に偏っています。特に、東北地方や関西地方、四国地方、中国地方は情報がなく、様子がわかりません。

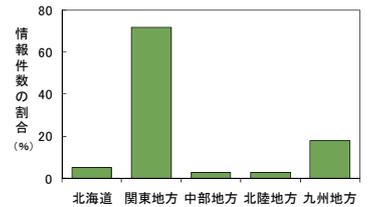


図2. アトリの情報件数の地域比較。



写真.
ズミの実に群れるアトリ。
(奥日光戦場ヶ原にて)

2. 調査にご協力ください!

情報の少なかった地域の渡来状況はどうだったのでしょうか。全国的な飛来状況を明らかにするためには、これらの地域の情報が必要です。まだ間に合いますので、昨年の12月から今年の2月末までの冬鳥の情報をお持ちの方は、ご協力ください。アトリに限らず他の対象種も含めて、お送りいただくと助かります。

アトリの渡来数の著しい変動を目の当たりにすると、こうした変動が生じる要因に興味を覚えます。イスカなどでは、マツ類の種子の生り具合と関係していると言われますが、アトリでは何が関係しているのでしょうか。長年に渡って冬鳥ウォッチを続けることで、渡来数の変動の周期が明らかになり、それに関わる要因を解明することができるかもしれません。今後ともご協力のほど宜しくお願いいたします。

レポート

デジカメでツバメの繁殖調査の計画

あまり知られていませんが、市販のデジカメにはインターバル撮影機能がついたものがあります。そのひとつPENTAX W60(価格は2万円台前半)は撮影間隔を10秒から99分の間でセットでき、



電池が切れるか4GBのSDカードが一杯になるまで撮影を続けます。実際にどれくらいもつのか、事務所に設置して試してみました。ストロボを使って15分間隔で撮影しても、1週間に亘って撮影されていて、コマ送りのような仕事風景は面白いものでした。アイデア次第でいろんな用途に使えそうです。この春はこのカメラをツバメの巣のそばに取り付けて、ツバメの産卵から巣立ちまでを撮影しようと計画しています。【神山和夫】

レポート

初鳴きや初認日の分布を決めるものは？ ～季節前線ウォッチより～

植田 睦之

季節前線ウォッチへの協力ありがとうございます。今年も多くの情報が寄せられ、ツバメの初認日が例年になく早そうなどなどが見えてきています。

季節前線ウォッチ 調査報告のページ
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kisetu/kisetsu2009.html

ツバメの初認日の年による違いをみると、昨年5月号で報告したように、暖かい年は早く飛来するといった傾向がありそうですが、地理的な違いは何によって決まっているのでしょうか？

1. 暖かい場所ほど早く鳴く

2008年のデータを使って、初鳴き/初認日がどのような要素と関係が深いのかを、緯度、年平均気温、標高などと比べてみました。図に各種の初鳴き/初認日とその場所の年平均気温との関係を示しましたが、ヒバリとウグイスについては、暖かい場所ほど早く鳴くという関係が見えます。ツバメ

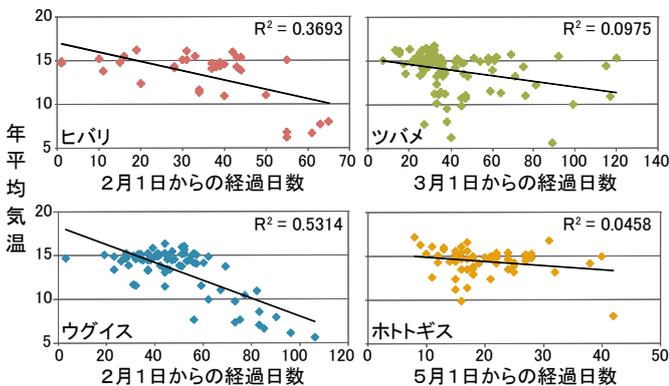


図. 2008年の初鳴き/初認日と年平均気温との関係。

2. 留鳥の初鳴きと夏鳥の初認の違い

なぜ、ヒバリやウグイスと、ツバメやホトギスとで違いがあるのでしょうか？1つは留鳥と渡り鳥の違いが考えられます。留鳥のヒバリやウグイスの初鳴きがその場所の気温に影響されるのに対し、夏鳥のツバメやホトギスは、その場所だけでなく、越冬地や中継地の状況にも影響されるので、その場所の気温との関係が弱いのかもかもしれません。そして南から渡ってきて、順次定着していくために、気温よりも緯度との関係が深いのかもかもしれません。

また、初鳴き/初認の時期の違いも考えられます。ヒバリやウグイスの初鳴きは2月から聞かれるのに対し、ツバメの飛来は3月後半、ホトギスにいたっては5月に入ってからです。季節の早い時期ほど北と南の葉の開き具合などの環境の違いは大きいものです。そのため、ヒバリやウグイスの方が、ツバメやホトギスよりも気温との関係が明確に現れるのかもかもしれません。

今年から季節前線ウォッチの対象種にオオヨシキリの飛来日とカルガモのヒナの見られた時期も加わりました。こういった新しく加わった種の初



写真. カルガモの親子. 多摩川の支流で撮影。

認日の地理的な違いや、年による気象条件の違いとの関係をみていくことで、初鳴き/初認日の地理的な違いが、留鳥か渡り鳥かといった習性の違いに起因しているのか、それとも時期的な違いに起因しているのかが見えてくるかも知れません。引き続き、調査へのご協力、よろしくお願いいたします。

スタッフ紹介

任期付研究員 採用しました！

この度、バードリサーチの研究員になりました本山と申します。ぼくは学生時代、野生生物学を幅広く学びながら、哺乳類や鳥類の調査のアルバイトに精をだしていました。そんな中、福島県でのニホンザル調査に行き、冬山で息を切らしながらサルを追っているとき、「ぼくの生きる道はこれだ!!」と確信しました。

卒業後は、すぐに福島県に移住し、ニホンザルやツキノワグマなど農作物に被害を出す哺乳類と、それと闘う人々と深く関わってきました。2年前に東京に帰郷し、フリーランスの調査員として働いていたときにバードリサーチのカワウの調査などに関わり、この4月からバードリサーチの研究員となりました。今後は、カワウやカラスなど、人間と

の間に軋轢が生じている鳥類の保護管理に携わって行ければと考えています。大型哺乳類時代に得た知識や知恵を、今度は鳥たちのために役立たいと思っています。

哺乳類と鳥類では生態も違えば調査法も全く違うので、いろいろと四苦八苦しながら現在勉強中です。いまだにカワウを1頭、2頭、と数えてしまいます…。至らぬ点もあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

【本山裕樹】



愛車にまたがって。

活動報告

カモ類の個体数変化で 移動経路を推測する！ 神山 和夫

昨年10月からスタートした渡り鳥飛来状況調査も終盤にさしかかりました。この調査は国内の渡り鳥の飛来状況を収集して情報提供を行うことにより、鳥インフルエンザ防疫対策の実施に寄与することなどを目的としており、バードリサーチが環境省から調査を請け負って実施しています。

全国39カ所で毎月3回のカウントが行われているため、このデータを利用すれば各地の個体数の変動からガンカモ類の国内移動を知ることができるのではないかと考えて解析してみたところ、渡り経路を推測できそうな種もあったので、一部をご紹介します。



1. ホシハジロは東と西から渡ってくる？

ホシハジロの秋の飛来時期を見ると、道東で11月上旬に飛来ピークがあり、12月に入るといったんほとんどいなくなりました。ちょうどその頃に東北では越冬個体が増え始めました。表1を見ていただくと、個体数の変動が、うまく道東から東北へと渡ってくるホシハジロの動きを捉えていることがわかんと思います。

鳥取・島根で調査を始めたのが11月下旬からだったので、そのころの個体数を渡り鳥飛来状況調査では把握できていないのですが、米子水鳥公園の神谷さんにお聞きしたところ、鳥取・島根のホシハジロの個体数のピークは10～11月だそうです。ちょうどそのころ、瀬戸内西部でもホシハジロが見られ始め、兵庫(瀬戸内側)や大阪の個体数も増えはじめました。鳥取・島根では、12月下旬に入ると個体数がぐっと減り、その頃から、瀬戸内西部や宮崎で個体数が増えています。

次に春の渡去時期はというと、東北では2月にやや減少したあと、3月上旬に渡りの通過と思われる個体数の増加

表1. 地域ごとのホシハジロの個体数の変化の比較。調査地点ごとに最大個体数を1とした相対値を算出し、複数の調査地点がある地域はその平均を使った。

月	旬	道東	東北	大阪	兵庫	瀬戸内西部	宮崎	鳥取・島根
10月	上	0.00	0.02	0.09	0.01	0.01	0.00	
	中	0.00	0.10	0.12	0.05	0.24	0.00	
	下	0.20	0.11	0.22	0.05	0.13	0.00	
11月	上	0.70	0.06	0.36	0.24	0.40	0.00	
	中	0.23	0.07	0.55	0.32	0.12		
	下	0.20	0.31	0.85	0.45	0.30	0.09	0.43
12月	上	0.02	0.54	0.70	0.61	0.37	0.06	1.00
	中	0.02	0.68	0.85	0.66	0.52	0.30	0.79
	下	0.20	0.83	0.79	0.75	0.69	0.68	0.33
1月	上	0.10	0.59	0.91	0.68	0.85	1.00	0.15
	中	0.00	0.83	0.78	0.59	0.92	0.09	0.18
	下	0.00	0.70	0.60	1.00	0.86	0.76	0.12
2月	上	0.00	0.70	1.00	1.00	0.73	0.00	0.05
	中	0.02	0.59	0.60	0.36	0.58	0.09	0.00
	下	0.00	0.46	0.99	0.54	0.89	0.35	0.01
3月	上	0.00	0.67	0.84	0.39	0.55	0.20	0.01
	中	0.50	0.34	0.46	0.07	0.12	0.00	0.01
	下	0.00	0.05	0.12	0.05	0.03	0.00	0.00

が見られました。その後の3月中旬に道東で個体数の増加が見られることから、このころに北への渡りが起きていることが分かります。

一方、関西から瀬戸内、九州にかけては2月下旬に渡りの通過と思われる個体数の増加が見られます。関西と東北のあいだの調査地ではこの時期に増加がみられませんが、以上から考えて、日本で越冬するホシハジロの渡りには、東(ロシア-北海道ルート)からと西(朝鮮・中国ルート)からの2つがあるのではないかと推測できます。

2. キンクロハジロも東西型か？

キンクロハジロの秋の飛来は、道東から函館・青森にかけて10月～11月にピークが現れます(表2)。そして、これらの地域で12月に個体数が減ったあと、東・北南部から東海にかけての調査地では個体数が増えだします。



一方、関西・徳島では、青森以北で数が増えたのとはほぼ同じころに個体数が増えていて、島根・鳥取でも、神谷さんによると10～11月に飛来のピークがあるということです。もし、道東～函館・青森にやってきたキンクロハジロが東・北南部～東海を飛び越えて一気に関西・徳島まで来たのではないとすれば、西日本の個体数の増加は、西からの渡りではないかと思えます。

それでは春の渡去の動きはどうでしょうか。道東では3月になると個体数の増加が見られるようになり、北への渡りが起きていることが分かります。関西から瀬戸内では、3月末になってもなお個体数が高い水準の場所も少なくありません。今回の3月下旬までの飛来情報からは、西日本の渡りがいつ起きているのかまでは、わかりませんでした。キンクロハジロの春の渡りについては、4月以降の情報の収集を行ってから、解析を行なってみたいと思います。

表2. 地域ごとのキンクロハジロの個体数の変化の比較。調査地点ごとに最大個体数を1とした相対値を算出し、複数の調査地点がある地域はその平均を使った。

月	旬	道東	函館・青森	東・北南部 ～東海	関西・徳島	瀬戸内	鳥取・島根
10月	上	0.48	0.05	0.01	0.01	0.00	
	中	0.42	0.17	0.33	0.11	0.03	
	下	0.60	0.82	0.10	0.11	0.08	
11月	上	0.71	1.17	0.07	0.45	0.28	
	中	0.42	0.52	0.20	0.56	0.10	
	下	0.42	0.42	0.11	0.54	0.17	0.88
12月	上	0.19	0.36	0.15	0.63	0.21	0.61
	中	0.17	0.02	0.34	0.51	0.16	0.88
	下	0.19	0.02	0.23	0.69	0.27	0.50
1月	上	0.17	0.09	0.35	0.84	0.36	0.26
	中	0.02	0.11	0.39	0.61	0.38	0.20
	下	0.01	0.01	0.55	0.78	0.56	0.25
2月	上	0.01	0.00	0.69	0.53	0.65	0.19
	中	0.00	0.01	0.97	0.49	0.57	0.06
	下	0.00	0.04	0.72	0.59	0.55	0.06
3月	上	0.50	0.00	0.81	0.69	0.70	0.09
	中	0.02	0.02	0.70	0.63	1.00	0.19
	下	0.52	0.04	0.57	0.70	0.82	0.19

シマアオジ 英: Yellow-breasted Bunting 学: *Emberiza aureola*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ホオジロ科

翼長: ♂72-82mm ♀69-75mm 尾長: 53-63.5mm
 嘴峰長: 10-13mm ふ跖長: 17.5-22mm
 ※ 清棲(1952)による。

羽色:

オスの夏羽は頭上, 背, 翼, 腰が茶褐色で翼には大きな白斑がある。額, 顔, 喉は黒色。下面は鮮やかな黄色で, 脇に茶褐色の縦斑がある。冬羽は, 頭上, 背, 翼, 腰の茶褐色と額, 顔, 喉の黒色は淡い色を呈し, 白色の羽が混ざる。メスの夏羽は, 頭が茶褐色, 頬, 背, 翼は褐色で, 白色の眉斑と頭央線がある。下面は黄色であるがオスに比べて淡い。



写真. シマアオジのオス(上)とメス(下)。

鳴き声:

さえざりはヒーヒーヒーチョリチョリまたはヒョヒョヒョーヒーヒ。地鳴きはチッチッ。

2. 分布と生息環境

分布:

国内では北海道のみで繁殖するが, かつて青森県と秋田県で繁殖が確認されている(後述)。世界的には極東のカムチャツカ半島, サハリン, 中国東北部などから, フィンランド中央部など, ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯に広く繁殖分布する。越冬地は, 中国南部, インドシナ半島, ネパール中東部, バングラデシュ, インド北東部などの東南アジア地域で, タイ南部や台湾には少ない(図1)。北海道に生息するのは亜種 *E. a. ornata* で, サハリン, 中国東北部, ロシア極東南部などにも生息する。基亜種 *E. a. aureola* はスカンジナビア半島からカムチャツカ半島まで広く分布する(Byers *et al.* 1995)。

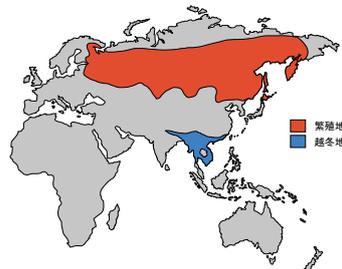


図1. シマアオジの世界分布。
Byers *et al.* (1995) から作図。

生息環境:

河川敷, 湖岸や海岸の草原, 高層湿原, 牧草地などで繁殖。越冬環境は, 耕作地, 水田, ヨシ原, 草原など。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 繁殖期 非繁殖期

繁殖地には5月中下旬に飛来し, 8月に観察できなくなる。一夫一妻で繁殖し, 雌雄で抱卵, 給餌する。

巢, 卵:

枯れ草などを使ってお椀型の巢を作り, 灰緑青色の地に斑のある卵を3~6個産む。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間は11~13日間。ヒナは孵化後13~15日で巣を離れる(柿澤・小海途 1999, Masatomi & Kobayashi 1982)。

渡り:

渡りの時期に, まれに対馬や舩倉島で観察されることがあるが, 本州以南の観察記録はほとんどない。このことから, 北海道で繁殖した個体群は, 本州を經由しないで, 大陸に渡って南下して越冬地に向かっているものと考えられている。鳥類標識調査(バンディング)では, 1961年から1995年までに国内で502羽のシマアオジが標識放鳥されており, とくに1973年から1986年までは毎年20~30羽が放鳥されているが, これらの鳥の移動回収記録はなく, 移動経路を示す客観的証拠はない(山階鳥類研究所 2002)。

食性:

昆虫や植物の種子を食べる。

4. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 本州での繁殖記録

青森県むつ市金曲(下北半島)では1976年に休耕田において, 繁殖が2回確認され, 巢, ヒナおよび成鳥の給餌行動が観察されているが, 繁殖は成功していない(三上ら 1977)。また秋田県八郎潟干拓地の休耕田では1982年にヒナ1羽の巣立ちが確認され, 1983年は同地でオスが3羽確認されている(西出 1987)。

● 減少の実態

北海道におけるシマアオジの減少実態は極めて深刻な状況である。環境省の委託を受けて日本野鳥の会が実施した自然環境保全基礎調査の結果では, 1974~1978年に52地点で生息が確認されており, 北海道の東部, 北部, 十勝平野, 石狩平野などの主要な平地ではほぼ生息が確認されていた(環境省自然環境局生物多様性センター 2004a)。しかし, 1997~2002年に同様の調査を実施したところ, 生息情報はわずかに15地点に減少していた(図2, 環境省自然環境局生物多様性センター 2004a)。調査地点数だけを単純に比較すると71%の減少ということになる。他にも同様の調査結果がある。北海道や国などがさまざまな調査で, 1974~1985年に行ってきた草原性鳥類を対象に行われたラインセンサスの調査結果を27ヶ所探し出し, 2002~2003年に同じ場所で, 5回(一部6回)の追試を行った結果, 1974~1985年には23ヶ所で生息が確認されていたシマアオジが, 2002~2003年には5ヶ所でしか確認されず, 地点数の比較では78%の減少という結果が得られている(環境省自然環境局生物多様性センター 2004b)。

シマアオジがいつごろから減りはじめたのかを示す客観的なデータは少ない。北海道野鳥愛護会が行っている探

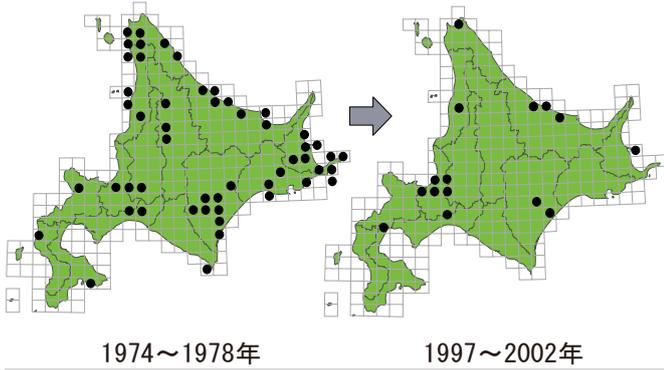


図2. シマアオジの減少実態。環境省自然環境局生物多様性センター(2004a)から作図。

鳥会の記録をみると、シマアオジが確認されているのは、植苗探鳥会、福移探鳥会、東米里探鳥会の3ヶ所である。東米里では1992年、福移では1999年が最後の記録である。植苗では2002年まで観察記録があるが、2003年以降の確認記録がない(北海道野鳥愛護会 2000, 2001a, 2001b, 2002, <http://homepage2.nifty.com/aigokai/04record/04h20record.htm>)。さらに2002~2003年に行った上述の現地調査などでは、野付半島、標津湿原、ウトナイ湖北岸、コムケ湖、江別市内などで生息を確認した、あるいは聞き取りによる確認情報があったが、2008年にはこれらに地域から消滅した可能性があり、シマアオジの減少は、なお進行しているものと考えられる。国外の減少実態は情報が少ないが、ロシアのウラジオストク市周辺で減少が報告されている(Nazarov 2004)。ロシア、アムール川中流域などでも密度が減少しているらしい(Chan 2004)。

減少の原因は明らかでなく、国内の農業事情、環境変化、越冬地や中継地の環境変化などが懸念される。しかし、風蓮湖の春国岱や走古丹、十勝の湧洞沼、ウトナイ湖北岸、野付半島、標津湿原などにおいてもシマアオジが観察できなくなっている。これらの地域はシマアオジが減少する以前から自然公園や鳥獣保護区に指定されており、人為的な開発はされていない地域である。大きな環境変化がない地域においてもシマアオジが減少していることを考えると北海道のシマアオジが減少している原因は、北海道の自然環境の変化によるものだけではないと思われる。

● 中国で食べられているシマアオジ

中国南部の三水市では1992年10月から毎年グルメ祭りが行われ、シマアオジを「空の朝鮮人参」と称して10万人の参加者がシマアオジを食べていたという。また、前漢時代の陵墓から副葬品と一緒にシマアオジの骨が出土しており、シマアオジは高級な食材として食べる習慣が古くからあったと記述されている(高 1996)。

中国でシマアオジが食べられていることについては、Chan(2004)に詳しい記述がある。これによると、2000年8月に中国当局がシマアオジを国の保護鳥に指定しているが、密猟が横行している。摘発事例だけでも、三水市、天津市、南海市、恩平市などで、それぞれ数百羽から数万羽のシマアオジが押収されている。

● レッドリスト

環境省のレッドリストでは、2002年に準絶滅危惧種(NT)に指定されていたが、2006年12月の改定で絶滅危惧IA類(CR)に格上げされた。IUCNのレッドリストでは、2008年10月の改定で、Near ThreatenからVulnerableに格上げされた。この改定は世界の生息状況を評価したものであるが、北海道の減少実態はあまり考慮されていないようである。

5. 引用・参考文献

Byers C., Olsson U. & Curson J. 1995. Buntings and Sparrows. Pica Press, East Sussex.
 Chan S. 2004. Yellow-breasted Bunting *Emberiza aureola*. Birding ASIA 1: 16-17.
 高育仁 1996. 禾花雀 天上人参. 大自然与生活1:34-35.
 環境省自然環境局生物多様性センター 2004a. 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
 環境省自然環境局生物多様性センター 2004b. 生態系多様性地域調査(湿原生態系調査)報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
 清棲幸保 1952. 日本鳥類大図鑑. 第一巻. 講談社, 東京.
 柿澤亮三・小海途銀次郎 1999. 日本の野鳥 巣と卵図鑑. 世界文化社, 東京.
 北海道野鳥愛護会 2000. 北海道野鳥だより第121号.
 北海道野鳥愛護会 2001a. 私たちの探鳥会.
 北海道野鳥愛護会 2001b. 北海道野鳥だより第125号.
 北海道野鳥愛護会 2002. 北海道野鳥だより第129号.
 Masatomi H. & Kobayashi S. 1982. Mating behaviour of the Yellow-breasted Bunting *Emberiza aureola*. J. Yamashina Inst. Ornith. 14:306-324.
 三上直樹・杉山優子・扇谷照美・大八木昭 1977. 下北半島でシマアオジが繁殖. 野鳥42(5):266-268.
 Nazarov Y.N. 2004. ウラジオストク市とその周辺の鳥類2. 極東大学出版, ウラジオストク. (藤巻裕蔵訳, 極東鳥類研究会)
 西出隆 1987. 八郎潟干拓地のEmberiza属について. Strix6:86-95. 山階鳥類研究所(2002)鳥類アトラス. 環境省, 東京.

執筆者

玉田克巳 北海道環境科学センター

静岡県浜松市出身。帯広畜産大学入学以来、北海道に住み着き、卒業後は北海道職員として中標津町、根室市、釧路市など、道東を転々とした後、2003年から札幌市勤務。大学時代は、シマアオジが大学農場にまだまだ普通に生息しており、農耕地の鳥というイメージが強かった。



美幌市宮島沼の冬水 たんぼの稲刈り風景。 [2008年9月28日撮影]

減ってしまった今では、農耕地で見られることはあまりなく、湿原などにかろうじて生息しているという状況である。根室市に住んでいたころ、春国岱ネイチャーセンターのレンジャーの方々がシマアオジの減少を訴えていたことに強い影響を受けた。2000年ごろから職場の上司に夏鳥の減少問題に取り組んだらどうかと誘われ、この問題に深く関わるようになった。

活動報告

カワウ広域保護管理データベース業務 Webサイトが公開されました！

高木 憲太郎

カワウによる被害については、関東と中部近畿で広域協議会が設立されて、情報の共有や広域連携による対策が行われています。しかし、カワウの保護管理の必要性は、これらの地域の外へも広がりを見せています。今年度バードリサーチでは、環境省から業務を受けて、カワウの保護管理に関するWebサイトを作成したり、広域協議会のデータの解析を行ったり、協議会の関係者間の情報共有の促進のための仕組みを作っています。この業務で作成したWebサイトが公開されましたので、ご紹介します。

カワウの保護管理 ぽーたるサイト

広域協議会ではどんな話がされているのか？今まで不透明だったと思いますが、設立の準備期間から積み重ねてきた会議の議題を公表し、活動状況を知ってもらうためのページや、特定鳥獣保護管理計画技術マニュアルや、

各都県の計画書、カワウ対策のパンフレットなど、これまでに作成されたカワウに関する資料を網羅したページ、関係する行政機関や漁業団体や自然保護団体、研究組織などでカワウについて記述のあるサイトを集めたリンク集などから成っています。

特に資料のページは、カワウやその対策を知りたい、保護管理のための計画を作りたい、と考えている人たちにとって、情報を集めるのに役立つのではないかと思います。こうした情報の共有が、カワウによる被害問題の軽減につながり、共存への一助になれば幸いです。

ぜひ一度ご覧いただき「こんなページがあると良い」など、高木 (takagi@bird-research.jp)宛にメールでご意見をいただけたら幸いです。よろしく願いいたします。

カワウの保護管理 ぽーたるサイト

<http://www.biodic.go.jp/kawau/index.html>



図. 作成したサイトの画面。

研究誌 Bird Research よい

カワウへのテープによる送信機装着方法

鳥の移動を調べる方のひとつに、衛星追跡があります。送信機を鳥に装着して放鳥すると、研究室にいながらにして鳥の移動がつかめます。送信機の装着方法にはいくつかあるのですが、カワウではテフロン加工した紐(テフロンリボン)をもちいて背中に背負わせています。ただ、翼の付け根のところがこすれて傷になることがあり、改善したいと考えていました。背中の羽にテープで送信機を接着する方法であれば、この心配はありません。しかし、カワウの季節移動などを調査する場合、3か月から1年ほど追跡するため、その期間は脱落しない耐久性が求められます。接着法の耐久性がどれくらいあるのか、わかっていなかったのので、それを試験した論文です。

高木憲太郎・佐藤達夫. 2009. カワウへのテサテープによる送信機装着方法の耐久性.

Bird Research 5: T15-T22

装着した後、いつまで送信機がついていたのかを調べるために、野外で飼育されていたカワウとその給餌場に餌付いていて、装着後も継続して観察ができる野生のカワウを使って調査しました。その結果、脱落した日がおおよそ特定できたのは7羽で、最長でも装着後81日目には脱落してしまいました。このことからテープによる送信機の装着では、カワウの行動圏や季節移動の調査に必要な3か月以上の耐久性はないことがわかりました。また、装着後5日未満という短期間に2つ脱落してしまいましたが、いずれも換羽期(6~8月)直前の5, 6月に装着したものでした。このことから、換羽期を避けて装着することで、早期に脱落してしまう危険性は減らすことができると思います。2か月程度の耐久性は確認できたので、追跡期間がそれ以下で済むような調査では、テープによる装着は有効だと言えます。

調査するときには、どんな調査でも少なからず鳥たちに負担を強いているものです。調査を行なう僕らは、できるだけ負担を減らす努力をすべきですし、そうすることは、鳥本来の行動を捉えるのにも役立つと思います。【高木憲太郎】

バードリサーチニュース 2009年4月号 Vol.6 No.4

2009年4月20日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: ツルシギ